

合格点に達し、入学は許可されました。しかし、さらにもう一つ、この後一日も欠席しないことという条件を付け足されました。栄養失調でもやけが崩れ、毎日水が溜まって歩けない足を引きずって、とうとう三月まで頑張って進級することができました。

終戦から引揚げまでの、忘れたいけれど忘れてはいけない一つの記録です。

## 北朝鮮脱出記

神奈川県 内藤 毅

祖国日本に、帰国の夢も叶わず

今なお北朝鮮の地に眠る、数万の

同胞の御霊に、この一文を捧げる

### 一 北朝鮮咸興の深夜の出来事

「ストーイ（止まれ）！」の声と同時に、私の胸元にソ連兵の尖った銃剣が突きつけられた。もう一人のソ連兵は、携帯している自動小銃の銃口を私に向けていた。ときは、昭和二十一（一九四六）年三月上旬、北朝鮮の咸鏡南道、咸興市盤竜台町で起きた出来事である。

そのころ私は、ソ連陸軍野戦三九三二病院で、日本人重傷患者の世話をしていた。当時、北朝鮮に抑留されていた在留邦人の惨状は、誠に筆舌に尽くし難いもので、だれもが信じられないような

悪条件のもとに置かれていた。食べることへの保証も、身の安全に対する保証もなく、略奪、強姦、そして拷問の好餌になっていた。

この惨状を何とか食い止めるには、ソ連軍の力を借りるしかなく、それには直訴するより方法がなかった。しかし、在留邦人の中に、このように難しい話をロシア語で話せる者が果たしているだろうか、威興日本人世話会の役員は頭を抱えてしまった。しかし、天は我々を見捨てなかった。満州国立ハルビン学院の学生だった田谷榮近さんが、威興にいたことが分かった。

世話会では、田谷さんに頼んでこの難しい仕事を引き受けてもらった。田谷さんの度重なる交渉によって、さすがのソ連軍北朝鮮鮮占領軍も、事態の重大性を認めざるを得なかった。ソ連軍の司令官スクーバ大佐は、日本人の重症患者のために病院を設けることを決めた。病院長には、独ソ戦最大の激戦地であったレニングラードの、攻防戦以来の歴戦の勇士であったペトロフ軍医少佐が任命

されて、日本人との折衝の責任者となった。

ペトロフ軍医少佐は、北朝鮮人民政府の管理下にあり、戦前にはフランス人が経営し、その後日本軍に接収されて陸軍病院となっていた済患病院を、隔離病院にすることとした。北朝鮮保安隊は、「なぜ！日本人のために病院を接収するのか！」という反対の声を黙殺して接収した。

ここに、ソ連陸軍野戦一九八〇四病院を開設したが、その後には收容能力の限度を超えたために、翌年の昭和二十一年に、同じく日本人の重傷患者を收容するソ連陸軍野戦三九三二病院が開設され、私は患者の世話に任じていた。深夜の出来事は、そんな状況のときに起きたことである。

「夜間通行許可証を提示せよ！」と言って、さらに胸元寸前に銃剣を突きつけてきた。正直に言って、私は正式な通行許可証などは持ち合わせていなかった。

私の頭の中では、いろいろなことがとっさに走馬灯のごとくに走り回った。このまま無残な死を

遂げるのか？ しかも父にも母にも、そして妹や弟にも最後の別れをすることも許されず、どこでどのようにして、どんな状況で惨殺されたのかも知られずに、短い一生を終わらせるのか？ 人生二十年にも満たずに大事な命を落とすとは。それも祖国日本の大事のために自分を捧げるのならともかく、ここでソ連兵に撃たれて犬死にするなんて、何とも口惜しい限りだ。死んでも死にきれない。

父や母、そして妹や弟は、このすぐ先五十メートルの所にある陋屋ろうおくに、ひっそりと身を潜めているのだ。それこそ、文字どおりひっそりとして毎日を過ごしている一家に、せめて最後の別れを告げたい。そして家族、特に飢えと寒さで泣く声すら出なくなっている二人の幼いきょうだいに、今日私が食べ残して持って帰って来た食べ物をお届けたい。何とかそれだけでも許してくれ！ 神様！  
そんな思いが頭の中で渦を巻いていた。

二 「せめて命だけでも！」  
混乱・錯綜している頭の中で、突然に閃いた。

「そうだ！ ソ連軍野戦病院で、勤務中に身分証明のために着けている腕章がポケットに入っている！ ロシア語で表示してあるので、ソ連兵には分かってもらえないに相違ない」と判断した。しかし、すぐに「ポケットに手を入れると、抵抗を示す動作と思われるのではないか！」という反論が、頭を駆け巡った。しかし、そんなことを考えている場合ではなかった。一瞬でも早く身分を明かさなければ、殺されてしまう。そう思うと同時に、右ポケットに手をつ込み腕章を引き出そうとした。その瞬間、「イリボンサラミヨ（日本人だな）！」とか「ナツプン（下らない）！」とかの朝鮮語でしゃべる言葉を聞くと同時に、日本軍の三八式歩兵銃の台尻を、私に向かって振り下ろす北朝鮮の保安隊員の姿が目に入った。

私の記憶は、この瞬間から失われてしまった。夢の中をさまよっているような幻覚が頭の中をよぎった。冷たい氷の張ったような路上で惨めな姿を打ち据えられながら、極楽浄土に行き着く旅の

合間に、短かった、本当に短かった、十数年の浮き世における自分の生きてきた姿が、走馬灯のように流れていた。

### 三 追憶・両親と私の生い立ち

昭和四年五月十七日、私は北朝鮮の平安北道で、父、正二、母、経の第一子として生まれた。父は、兵庫県の播州、母は同じく兵庫県の但馬の生まれであった。同じ兵庫県ではあるが、播州と但馬は瀬戸内海側と日本海側とに分かれている。それは、広島県と島根県、そして岡山県と鳥取県のように風俗、気質などが異なる地域を県という行政区に分けているのが通例であるが、兵庫県は播州と但馬のごとく、同じ県でも瀬戸内海と日本海、さらに理屈をつければ、淡路島を経て太平洋という三つ大海に面していると言われる。二つ以上の大海に面しているのは、本州南端の山口県と青森県を除き、兵庫県だけである。

それぞれの地域的な特異性は、その地方の古来からの風俗・習慣はもとより、住民の人情気質も

大きく異なっている。当然、両親もその点は同じで、それぞれに地域の特異性を受け継いでいた。

父は、次男として生を受けたので、正二という名にはその感が十分にあつたが、ただ長男を育三、三男を猪一と名付けた私の祖父の考えには、感服の外はない。通常、長男を一郎と名付け、次いで二郎、三郎というのならだれでも名付けられるが、長男、次男、三男を三、二、一とした祖父の思いは、今になれば伺い知ることができない。

当時の民法の定めに従って、次男以下は故郷で遺産を期待することは叶わず、次男の父は朝鮮へ、三男の叔父は満州で満鉄に勤めるなど、それぞれ独立独歩の道を進んだ。

父が朝鮮に行くことになった理由を、正直なところ私は知らない。しかし、想像するところ、本家の内藤吉三郎が京城（ソウル）にいたことだったと思われる。かつて日本経済新聞の「私の履歴書」に掲載されていた鹿島守之助氏の語っていたところによると、「私に思想的影響を与えた人に、

後に京城帝国大学の教授になった、内藤吉之助という従兄があった。内藤は文才があつて、当時『文章世界』やその他の雑誌の懸賞小説に応募しては、よく入選していたが『太陽』の懸賞小説には一等で入選した。この小説は、東京の府立一中の学生生活を書いたものである。選者は島崎藤村であったが、内藤を評して『非常に優れた人であるが、おそらく文学の道には進まないだろう』と言つた……』ということだが、果たせるかな内藤は府立一中から一高・東京帝大の法科を出て、京城帝大の教授となつたのである。また、父の母方の松尾臣善が、明治末期から大正にかけて、日銀総裁として日露戦後の朝鮮問題についても深く関わつたこと、さらに父の叔父が、陸士第一期卒業生で、朝鮮や満州を転戦したことなどが加わつて、父を朝鮮に誘い出すことになつたのではないかと察するものである。しかし二十数年後には、それこそ筆舌に尽くせぬ苦難に遭うことになるうとは、全く、全く予期せぬ出来事であつた。

母の経は、但馬の素封家の家に生まれたが、家は隣村まで他人の土地を通る必要がないと言われるほどの資産家であつた。母の姉は東京の女高師を出て、母校の豊岡高等女学校の教師をしていた。母はその豊岡高女に入学したが、先生である姉から「なぜ、あなたにはもつと良い成績がとれないの？」と言われたとのこと。それに対して、母は「お姉ちゃんの担任クラスと違って、私のクラスは秀才揃いなよ！」と答えたとのことだつた。この話は、伯母にしてみるとよほど納得し難い返事だつたらしく、数十年後に私がアメリカで初めて伯母に会つたとき、「あなたのお母さんはねえ……」と言われて、私はどう答えて良いのか困り切つたことがあつたのを、今でも覚えてゐる。

母は、豊岡高女を卒業後、明石女子師範学校の専攻科に進学して、小学校正教員免許を取得して、母校の山口小学校で結婚するまで教師を務めた。家から学校までは、当時はまだ珍しく、男性でも乗っている人はまれだつたと言われる自転車で、

しかも羽織・袴姿での出勤は、人々の注目を集めていたとのことだった。教師としての母の資質については、何も証明できるものはないが、後年になっても何人かの教え子の方から毎年手紙を頂き、私が目撃した例としては、八十歳を過ぎた母の許に「先生！」「先生ー」と言って、六十キロメートル以上も離れた山口村から、野菜などを持った教え子が訪ねて来る姿に会っている。それには自然と頭が下がったものだった。教え子の方にも、そして母に対しても。

#### 四 北朝鮮での戦前の生活

私は平安北道で生後三年を過ごしたが、父が咸鏡南道の永興に転任になったので、一家も永興に移転した。そのときのことと記憶に残っていることは、ただ一つである。大きな河、今考えてみると多分、大同江ではなかったかと思うが、車を大きな船に乗せて、その大きな河を自動車に乗ったまま渡ったことである。後年、父から「一番幼いときの記憶で残っていることは？」と尋ねられ、

この話をしたところ、「トルストイは産湯の温度が熱かったと言ったそうだが、毅とは違うなあ！」と言った父の弁が忘れられない。

永興では昭和十一年四月までの三年余りを過ごしたが、ここで妹の芙美子と靖子が生まれた。この間に雇っていた子守りによる火の不始末から、自宅全焼という災難に遭った。それ以後、子供が何人増えようが自分が倒れようが、母は人手を借りるということはしなかった。

父の次の任地は、甲山という所であった。中国東北部に近い山村で、鉄道はもちろんのこと、ガスも水道も、そして電気もない。その上に、冬期になると零下三十度まで気温が下がり、北風が強く吹く地であった。私の通った小学校は全校生徒が二十数人、一教室に一年生から六年生までが一緒に学んだ。しかし、こんな小学校でも、次に転校した三水小学校よりはずっと大きかった。三水小学校では、新たに一年生に入学した妹を入れても、全校生徒数は九人だった。

甲山にはバスが通じていたが、三水には小型車がやっと通れるという道しかなく、当然のこと、ガス、電気、水道、そして鉄道も通じていなかった。厳冬期には氷の張り詰めた道を通って、深い井戸から水を汲み上げて、炊事、育児、掃除、洗濯をしていたし、それ以外にも、石油ランプ磨きも毎日の仕事で、それらをこなし深夜まで働いていた母の姿を思い出す。

父は、在鮮中、朝鮮人子弟の教育に身を捧げ尽くして、日常の生活も、現地の人の生活と同じで質素を旨としていた。「闇で食糧などを買うな！」の方針を貫き通していた。そのころ、食事中に母が立ち上がるので、「お母さん！ どうしたの？」と聞くと、「心配しないで。ちよっと！」などと返事をするのがたび重なった。子供たちに食べさせるために、自分は絶食していたことを知ったのは、ずっと後のことだった。

昭和十八年に生まれた妹の直子は、明らかに栄養不足の状態であり、生まれて四カ月後に短い一

生を終えてしまった。両親は六人の子を得たが、そのうち三人は終戦前後に失っている。しかし朝鮮人の教育水準向上のために、教育環境の整っていない中で日夜働き続けている両親の姿は、子供の目にも何かとても尊いものに感じられて、私たちの生きる力となって今日に至っている。

昭和十四年には、父は咸鏡南道端川にある農学校の校長になった。私と妹は、端川小学校に転校したが、ここは一クラス二学年で大きな学校に思えた。片道約一時間の徒歩通学だったが、担任の峯先生の熱心な授業で全く苦にならなかった。翌年の昭和十五年の春、第一志望校の道庁所在地にある、咸興中学校に無事入学することができた。ただ、端川小学校卒業に際して授与されることが決まっていた道知事からの表彰状は、転校生ということで辞退することを余儀なくされたのは残念だった。

咸興中学校は、創立以来まだ六年という極めて歴史の新しい中学校で、一学年の定員はわずか五

十人で六年間変わっていなかったが、その間一高、八高をはじめ日本の旧制高校、京城帝大予科、陸士、海兵などや満州国立の各大学に多くの合格者を輩出する、極めてレベルの高い進学校であった。

私は入学すると、小学校一年で始めた剣道部に入った。また滑空部にも入部して、日本陸軍連浦第一〇〇航空隊で、滑空訓練を受けた。則安部隊長、専任教官は、則安部隊長が航空士官学校在校時の教官だった町中准尉、内務班は石原伍長と、本場に帝国軍人のすばらしさを身をもって指導して頂いた。後年、私がアメリカの飛行学校で医者 の長男と共に、日米のパイロット免許を取得したのも、この当時のことが遠因となっているのかもしれない。

一年のとき、陸軍幼年学校も受験した。本籍の兵庫の村役場から、陸幼合格者の身元調査があった。「合格おめでとう！」という電報を受けたし、学校の担任教師からも、クラス全員の前で「内藤、陸幼内定」と言われたが、結局は正式な合格通知

はこなかった。理由は分からない。しかし考えてみると、陸士一期の大叔父が、日露戦争に従軍した際、部下の一人が行方不明となりその責任をとって除隊したが、あるいはこのことが影響しているのではないかとも思われた。もし合格して、広島幼年学校に入校していたら、あの原爆で全滅していたかもしれない。北朝鮮に残っていて返って良かったとの思いもあった。しかし後に知ったことでは、広幼は原爆投下の以前に別の所に疎開をしていて、校舎にその後入った召集兵が大惨事を受けたそうだ。

##### 五 終戦（北朝鮮では敗戦が実感だが）

昭和二十年八月十五日の玉音放送は、朝鮮窒素肥料株式会社との興南工場で聞いた。当時、学徒動員の工場で、航空燃料用パイプの鉛の溶接作業をしていた。夏期における工場内の高熱と、度重なる火傷が悩みの種であった。私自身も、腹部を熱い鉛管に誤って接触したための火傷の跡が、その後数十年を経た今でも消えることがなくらいで

ある。

北朝鮮の場合、八月十五日にはソ連軍がソ鮮国境を越えて、スターリン戦車を先頭にして南下を続けてほぼ一週間、ソ連海軍も艦砲射撃と敵前上陸を強行していて、まさに地上戦近しの様相を呈していたから、終戦に関する天皇陛下のお言葉は、むしろ安ど感さえ与えて下さった感があった。それに、咸興日本軍司令部より「咸興在留邦人の生命、財産は軍が保証し、「日本に安全に帰国させる」との布告があつたことも一因であつた。

しかし、八月二十一日にはソ連軍は咸興に進駐して来て、八月二十三日には日本軍の完全武装解除があり、事態は一変してしまつた。「ソ連軍や北朝鮮に勝手なことはさせない。邦人の生命、財産は守る」ということは全く不可能となつた。

八月二十五日になると、ソ連軍は新たに樹立された朝鮮民族執行委員会に行政権を付与し、同委員会は直ちに行動を開始した。

八月二十七日及び二十八日には、知事以下の道

庁などの日本人公務員、警察署長以下の警察関係者、日本人有力者などの一斉連行を行った。

#### 六 恐怖社会となる

そのとき我々日本人に待ち受けていたものは、まさしく恐怖と暗黒の世界であつた。仕事も収入もなくなり、一番大事な食べる物もなくなつてきた。それにも増して、我々日本人を恐怖の極限に追い詰めたことは、無警察状態だつた。いや、それ以上であつたかもしれないことは、我々に自衛することも許されなかつたことだ。

ある日のこと、突然に自宅に乱入して来た者によつて、家中のめぼしい物は衣類だろうが食糧だろうがすべて持ち去られ、挙げ句の果てに、その家の住人全員に即時退去を命じられた。その人たちは、住む所もなく路上に投げ出されたままになつた。さらに男は連行されて暴行を受け、女は恥辱のターゲットとなる。

咸興地区における日本人居留民の当時の実情は、次のような有様である。昭和二十年八月十五日現

在の咸興市の日本人は約一万一千六百人、これが昭和二十一年一月一日には約二万四千九百人に増える。戸数では、昭和二十年八月十五日現在で約二千二百戸であった邦人居住戸数が、翌年一月一日には約一千二十八戸となった。これは、家を追い出されたために戸数が半数以下に激減したものである。当時、日本人は他地区への移動が禁止されていたので、引揚げとか転居とかによる家屋数の減少ではない。

結局、一戸当たりの居住者数は、五・二七人から、なんと二十四・二二人に膨れ上がった。広い家や間数のある家を追い出されて、倉庫や知人の家に入ったり、ドアもないかつての陸軍の兵舎に、致し方なく押し込まれた人々の実態である。

盤竜台町の我が家は、四間に家族六人が暮らしていたが、この家でも三家族を受け入れていた。不幸中の幸いというか、北朝鮮保安隊による強制立ち退きという最悪の事態もなく、北朝鮮脱出までここで過ごすことができた。

しかし、離れに住んでいた五人家族は、羅南から命からがらソ連兵の攻撃を避けながら、歩きやすい海岸道路ではなく山沿いをさ迷いつつ歩いてやつと咸興まで逃げて来たとのことだった。良い方で、お互いに気心も分かって喜んでいただけが、それも長く続かず、昭和二十一年十二月二日、咸興地区以外からの避難民に対する、かつての陸軍兵舎への移動命令によつてやむなく移られた。しかし、その兵舎たるや、それまでの略奪によつてドアも床も破られて、これから零下三十度近くになる厳冬期に向かって住む環境ではなかった。それに加えての食糧不足で、その冬だけで約三千三百人の日本人のほとんどが亡くなったことを、幸いに生きて再び咸興に戻つて来た人から聞いた。

私は、小学校はすべて北朝鮮の甲山、三水、そして端川の三校で六年を過ごしたが、つい最近まで同窓生のだれ一人としてその安否を確認できていた。ところが、咸興小学校の先生をしておられた村上清先生の大変なご尽力によつて、一人だ

けその消息を知ることができて、九十歳を過ぎた村上先生には本当に感謝を申し上げている。

小学校時代の私の同級生は、ほぼ全員がかの地で哀れな一生を終えたものと思われる。その点、満州や台湾や南朝鮮で学校に通っていた人たちが、戦後母校を訪問すると、同級生たちに温かく迎えられ、また先輩として学校でスピーチを依頼されるなどということを知ることにつけ、民族の差、意識の差だけでは割り切れないものを感じる。不運というものか。しかし、まだ生きて帰れた者は幸せなのだと考える昨今である。

しかし、深く考えたと暗い話ばかりではなく、一つや二つは明るい話題もないわけではなかった。その一つ。ソ連軍の徒歩行進の際の、軍歌演習である。日本軍のように大声を張り上げての軍歌ではなく、二部合唱、三部合唱での整然とした歌い方である。敵兵の歌とはいえ、誠に美しく響いたものであった。歌と音楽に、体全体が自然と調和するのは、西欧人の生まれながらにして持つて

いる特質かと、その後二十数年アメリカに住んでみて感じたことである。

もう一つの明るい話。それは最初に書いたように、ソ連軍による日本人患者用の病院の開設・運営である。終戦に伴って、日本政府はその苦しい状況のもとにあつても、アジアの各地に引揚者のための船を出したが、北朝鮮の在留邦人には船が出なかった。

咸興市に北朝鮮の各地からたどり着いた邦人数は、昭和二十年末までに約六万人と言われるが、昭和二十二年一月における生存者は、ソ連軍の調べでは約二万五千人とのことで、約三万五千人、約六〇パーセントの邦人が死亡したことになる。このような極度の悪条件の中で、ソ連軍が日本人のために二つも病院を開設してくれたことは、大変なことであつた。ソ連軍部内においても、朝鮮人民委員会においても、当然のことながら、侵略者日本人に対してそこまでする必要はないのではないかという激しい批判が出たが、ペトロフ院長

はその批判に敢然として立ち向かい、日本人患者を一人でも多く救済しようと、日夜努力をした。

しかし、昭和二十一年三月には自らも発疹チフスにかかり、三十六歳の生涯を終えた。モスクワに残した家族に会うこともなかった。ペトロフ院長の博愛精神によつて、一命を保ち得た日本人も多数いたことだった。

ソ連兵の蛮行はとどまる所がなかった。我が家にも何度も闖入ちんにゅうして来たが、その都度同居四家族の全女性を裏口から逃したり、床下に押し込めたりしてかくまったが、深夜といえども安眠を許される状況にはなかった。我が家だけではなく、近所のアパートに住んでいる四人の若い女性も、我が家を頼つて毎晩のように庭の草むらに身を隠しに来ていた。

ところが、ある日を境にして突然四人の姿を見なくなった。「どうしたのかなあ!」「もつと安全な場所を見付けたのでは?」「そうだと良いけれど!」などと両親と共に話していたその数日後、

私たちの不安が適中したことを知り、愕然とした。四人グループの一人が、突然に我が家に訪ねて来た。その人の顔色はまさに土色で、半ば放心状態。

私の知っている、あの若々しい女性とはどうしても思えない。その人はいつもかくまってもらっていたので、ひと言お礼を伝えたいと思つて来たのだと言っていた。

四日前の夜のこと。いつもと同じように玄関の所でソ連兵の声を聞いたので、いつもの手順どおり我が家に走り込むべく裏口に向かった。そこには朝鮮人の姿があり、四人とも簡単に捕らえられて、その夜にはソ連兵によつて四時間に及び襲われたとのことだった。両親は、その人にいろいろと聞いていた。「何か、その兵隊たちのことを覚えていないか?」「髪の色とか、背の高さとかでも」

「今は、ソ連軍も軍規を厳しくしようとしているらしく、暴行などの被害に遭つたら届け出てほしいと言っているのだ」「とても無理です。私たちは地面に伏せさせられたあと、四つん這いにさせら

れ、モンペをはぎ取られたの。相手の顔は見えなかった。もし見える姿勢だったとしても、恥ずかしさと口惜しきで、涙があふれて人を見ることなして。母は「ご免なさい！ 無理なことを聞いて」と言った。半狂乱状態のこの若い日本人女性に、男としての無力さ、腑甲斐なさを恥じ、慙愧の念に駆り立てられたことを忘れない。

災いは、そのうちに我が家にも及んできた。ある日の深夜、玄関を棒のようなものでたたく音で仮眠から飛び起きた。「内藤正二を出せ！」と言っている声が聞こえた。私は、父に「お父さん！ 出ないで。僕が話してみる」と言つて玄関に行った。父は在朝鮮数十年、ひたすら朝鮮人の教育に身を捧げてきた。一部の在朝鮮日本人とは異なり、決して特権意識や民族征服意識というものは持たなかった。その事実を話してみようと自分自身に言いながら、玄関に向かった。そんな父が、なぜここで逮捕されなければならないのか？ 興奮して

いる保安隊が納得してくれるかどうかの自信はないが、ともかくよく説明をしようと思った。保安隊員が二人、玄関前に立つていたが、「お前ではない。早く内藤正二を出せ！」とか「ぐずぐずしている、お前も逮捕するぞ！」など口々に叫んでいて、とてもこちらの話など聞いてくれそうにもない雰囲気となった。万事休すと思ったとき、脇にいたこの保安隊の隊長らしい人が、私に問いかけてきた。「内藤正二は咸興農学校の内藤先生か？ 自分は咸農の卒業生だ。内藤先生は今でも尊敬している。今夜は騒がせて済まなかった。先生によろしく」と言つて引き揚げて行った。

引き揚げてしばらく経つてからのこと。韓国ソウル市から、父に二通の航空便が届いた。父の教え子二人からの手紙であった。朝鮮動乱で南朝鮮に逃れ、その後、医大を卒業して医師となり、今は二人ともソウル市内の大病院の院長をしているとのことだった。文面には、「果たして北朝鮮から無事に日本に帰国されたのかどうか心配していま

したが、日本でのお住まいを調べるのに大変に時間がかかり、ごあいさつが遅くなり今日に至りましたことを、心からお詫び申し上げます」という書き出しに続いて、「先生から、人間だれでも一日二十四時間しかない。時間を有効に使うことをまず考える。そして人に役に立つ仕事に就けと教えられ、この教えを二人とも一日も忘れずに今日に至りました。御存命中に何としてでもお礼を申し上げますたく、ここにお手紙をお届け申し上げます次第でございます」と結んであった。当時は、韓国政府が一方的に李承晩ラインを設定していて、日韓関係は最悪で、だれであれ日本人に親しみの気持ちをちよつとでも示すことは、韓国人として大変な決意を必要としていた時代である。この手紙を読んだ父は、今まで私たちにも見せたこともないような、大きな笑みを浮かべて心から喜んでいて、私にも繰り返し二度にわたって次のように言った。「毅よ！ 父は財産も地位も、何もかも北朝鮮で失い、日本に帰国後もつらい生活を強いられてき

たが、教え子が、それも二人もこんなに素晴らしく成長し、『先生！ 先生！』と、それも日本人以外の教え子から言われて、本当に幸せだよ」と、滅多に感情を顔に表すことのない父が、このときばかりは涙ぐんでいるように見えたものだった。

#### 七 北朝鮮人民委員会と日本人居留民

ソ連軍から行政権が北朝鮮人民委員会に移つてから、日本人に対する復讐とも思える北朝鮮保安隊の行動が目立ち始めた。

昭和二十一年九月一日に、咸興大和町の在留邦人六十一人が、なんの理由もなく逮捕された。さらに、九月二日から三日には日本人通行者の検問が行われ、男女約二百人が投獄の憂き目に遭い、厳しい詮議に遭った。

そしてそのとどのつまりが、昭和二十一年九月十四日であった。市内在住の全日本人は幼児から老人に至るまで、炎天下の公設グラウンドに集められ、赤ん坊といえども水一滴飲むことも許されず、自動小銃の包囲の下におかれた。その間に日本人

の居住していた全家屋は、徹底的な搜索を受けた。その結果、何人かの同胞がその場で逮捕された。

しかし、昭和二十一年も十一月になると、ソ連兵による暴行、日本人女性への強姦などは減少してきた。ソ連軍憲兵による取り締まりの結果か、第一陣として進駐してきた、女に飢えた囚人兵の交代によるものか、定かではない。

しかし、もう一つ日本人にとつて大きな大きな問題は、同胞の死体処理だった。外出から帰ってみると、昨夜まで一緒に過ごした人が何人も死亡していた。部屋の中は死体だらけで、生きている者が横になるスペースすらない有様であった。いかに厳寒の北朝鮮でも、死体には毎日変化が生じる。この状態を何とかしなくてはと、日本人会は十一月に総力を挙げて、まだ動ける日本人約五千人に呼びかけて、旧日本人墓地の近くの山腹に地下三尺（約九十センチメートル）の溝を掘ることになった。厳寒が目の前にきていて、これ以上の猶予は不可能であった。しかし、三千人の死体で

この長い溝もすぐにいっぱいになった。棺に死体を納めることももちろん不可能で、火葬するにしても燃料もなく、遺骨を家族に戻すことも論外のこと。裸身でないぎりぎりの姿の孤包みの仏様が、次々とこの溝に投げ込まれた。

だれもが希望に燃えた志を抱いて朝鮮に渡り、明るく幸せな家庭を築こうと一生懸命に努力をしていたのに、ある日、北朝鮮にいたというだけのこと、こうして無念のうちに一生をこんな形で終わらざるを得なかった口惜しさは、計り知れないことだ。さらに、残された者にとつても、遺骨も戻らないとあつては、誠に痛恨と言う以外にはない事態であった。

この共同墓地は、翌春になると雪解けと共に一部の死体が無残な姿で地上に露出しているということ、再び山腹に集まって死体に土をかける作業を行い、見苦しくないように、せめてものお務めをさせて頂いた。

今でも、北朝鮮の山腹には放置状態にある多数

の仏様が、救いの手を待っておられる。何とかして、祖国日本にお連れできないかと、考えあぐねている日々である。

昭和二十二年三月二日、ソ連の樺太漁業関係者が咸興を訪問して、ソ連の樺太漁業の従業員として、日本人を雇用したいという求人があった。「募集人員は四千人、給与は経験により月八ルーブルから二十六ルーブル」とのことだった。「日本に帰っても食糧もないこの際、いつそのこと樺太に移住してはどうか？」という謳い文句だった。何人の日本人が応募したのか、そして渡航した人がいたとしても、その人たちがその後どうなったのか、私は正直なところ知らない。

#### 八 北朝鮮脱出、帰国

昭和二十二年の春ごろになると、ソ連軍も北朝鮮人民委員会側も、徒歩あるいは小舟などで北朝鮮を日本人が離れることを、強くは阻止しない風潮が出てきた。はつきりした理由は分からないが、咸興地区在留の日本人の状態が、前に書いた統計

のとおり、あまりにも悲惨な状況にソ連側が国際社会の強い批判を恐れたことと、満州などのソ連占領地域を含む他の地域、中国、東南アジア、それに北朝鮮などすべての国、地域からの日本人の引揚げが始まっていることなどから、北朝鮮の在留日本人を、これ以上現地に留めておくことが困難と判断したことなどからであろうと考えるが、あながち大きな誤りではないだろう。

この機を逃してはならずと、私たち家族も動き始めた。我が家の考えでは、徒歩により三十八度線を突破するよりも、漁船を雇って海上から北朝鮮に向かうことが得策とし、それに賭けることにした。

昭和二十二年五月五日、私たちの家族と、我が家に住んでいた婦人二人は、他の脱出者と共に夜陰に紛れて西湖津港近くの倉庫に入った。しかし、約束した漁船は待っても現れず、遂に保安隊員の強襲に遭い、一時は死を覚悟する場面もあったが、幸い翌日に乗船することができた。三隻が同時に

出発したが、途中で大時化に遭遇して、甲板の上で腰まで水に浸かりながらもすごい揺れに耐えて、幼い弟をずっと抱きしめていた。幸いだったことは、同時出発の三隻の漁船のうち、この船だけが発動機を備えていたことである。他の二隻は帆船であったので、時化の中、簡単にソ連海軍によつて拿捕されてしまい、陸上に連行された。猛烈な風雨の中で、ソ連海軍の艦艇も諦めたのか追跡がなく、翌日には三十八度線を海上で越し、南朝鮮の注文津に着くことができた。

しかし、ほつとしたのも束の間、思いもよらぬ難問が待ち構えていた。注文津の米軍指揮官は、我々北朝鮮からの脱出日本人を、無条件で受け入れるわけではなかった。米軍指揮官は、「今夕、我々の部隊で幹部夕食会の予定がある。ついては十五人の女性を手伝いに出してほしい。我々は東南アジアの各地で戦ってきたが、まだ本国に帰国することはない。従つて、あるいは女性の何人かの方には、その後のお付き合いもお願いするかも

しれないが、承知しておいてほしい」と言った。それまでは、アメリカ人は極めて紳士的と聞いていたので、それを聞いて本当に驚いた。

何とも返事ができないままに、いたずらに時間だけが過ぎていた。指揮官から「即刻、責任者と話がしたい」との申し入れがきた。だれも責任者として名乗り出る者はいない。そのままでは船の接岸が許されずに、船長は我々を乗せたまま再び北朝鮮に帰航すると言い出すかもしれない。沈痛な雰囲気、船中の人々に広がっていった。そのとき、父が突然に立ち上がった。「私に交渉させて下さい。妻や娘を差し出せと言うのなら、私の命を差し出し上陸を認めさせます」と、強い決心を秘めて発言した。二百余人の一団の中で、責任者としての重責を自ら買って出たのは、四十六歳の父だけだった。米軍指揮官も父の気迫に押されたのか、全員の即時上陸を許可した。私たち一団は救われたのであった。

私たちはこの後、釜山を経て引揚船で博多港外

に着いたが、船内で伝染病が発生したために約一週間、港外での待機を余儀なくさせられ、その後晴れて祖国に帰ることができたのであった。

引揚げの途中で、釜山港では韓国からの引揚者と一緒になる機会があったが、その引き揚げる人を見送りに来た韓国の人が、「日本人にはお世話になったので、今日はお土産を持って見送りに来たのです」と言っていた。また、博多で会った中国からの引揚者は、「蔣介石総統の指示で、私共日本人はとても心のこもった扱いを受けた。しかし、気の毒だったのは朝鮮の人で『今まで日本の威を着て威張っていた』と言って仕返しをされていた」というような話をしていた。同じ引揚者といっても、それぞれの実情は天と地ほどの差があることを、初めて知ったものだった。同じ引揚者同士であっても、北朝鮮の在留同胞の苦難はとても分かってはもらえまいと思ったものだった。

帰国してからも、勉強をすることはもちろん大切ということは分かっていたが、引き揚げて来る

人への援助の手を差し伸べるのも重要と考えて、「海外父兄救出学生同盟」に入り、駅頭や車中で引揚者の手伝いを二年間続けた。全国主要駅に支部があり、主要大学の有志が献身的に働いていて、大変に感謝された。

我が家ではまず直面したのが、生活苦だった。地主であった母の実家では、祖父・叔父共に亡くなり、年老いた祖母と叔母が女手一つで耕していたひと握りの農地以外は、農地解放で全部取り上げられてしまい、男手を失った以上の深い傷を負っていた。父は、早速に県庁や市役所などに教職を求めて走り回っていたが、「外地にいた者は樂をして良い生活をしていようではないか？ 終戦になったからといって、のこのこの日本に帰って来て、では仕事を下さいなんて虫が良すぎるのではないか。日本にいた者も仕事がなく困っているのに！」というような悪態をつかれていた。めったに感情を表に出さない父ではあったが、この話を聞いて帰って来た夜は、さすがに打ちのめさ

れた風で、「何も特別に扱ってほしいなどと言ったわけではない。せめて相談に乗る素振りでも見せてくれたらね？」困って頼って来た人をたたきぬめすようなことは、毅！ しない方がよい」と、私を諭すような口調で言っていたのが、今も耳に残っている。

こうした父母の窮状を見るにつけ、十七歳とはいえ長男であり、そして日本男子である限りやらねばならない、徒食は許されないと心に決めて、炎天下にトロッコを押しての土方作業をした。一日何も食べなかったこともあった。恥ずかしい話だが、米一升を持って汽車に乗ったこともあった。当時は、売る目的で米の移動は禁止されていて、見付かると警官に没収された。さらに、母と二人で姫路でおやきを売ったこともあった。

ただ幸せだったことは、北朝鮮のごとく死の危険、強姦などのリスクが無く、そしてみんな貧しかったが、日本という祖国を何とかして良くしようという意欲に、国民一人一人が燃えていたこと

である。

当時、公務員の給与は月平均五百円であったが、国立の旧制高校や大学予科の授業料は、確か年二百二十円、それも貧困者には免除規定があった。私もその適用を受けて復学した。第一外国語としてフランス語を選んだが、これが幸いして、作家の山崎豊子さんの依頼を受け、仏語の翻訳のアルバイトをして、さらに上田安子さんのフランス語の家庭教師へと広がり、もう土木作業はしなくても生活できるようになった。

フランス語の教員免許証は今も保持しているが、後年、フランス政府保証債、フランス電力の起債などに際しては、フランス語ができるということ、日本からの責任者に選ばれ、本当に有り難いことだった。

ロシア語については、ニューヨークに行ったときのこと、タクシードライバーがひどい訛りのある英語で話をするので聞いたたら、ロシア移民とこのことで、ロシア語で話しかけたら、「ガバリーチ

エ パルスキー（ロシア語できるんだね？）と喜んでいたことを思い出す。

しかし、韓国とか北朝鮮との関わりは必ずしもプラスに働くというわけではない。私は、やはり生まれ育った土地の食べ物、キムチ、蟹、鱈子、冷麺、辛い唐辛子などが今でも大好きです。二十数年住んだニューヨークでも、韓国レストランにはよく行き、注文は韓国語でしていた。ところがあるとき、韓国人のウェイトレスが私の韓国語が理解できずに、質問をした。私は韓国語で答える自信がなかったので、英語で返事をした。その途端、顔色を変えた店長が走り寄って来て、私に「お前！ 韓国人のくせに、なぜ英語を使うのだ！」とどなったので、私は「私は日本人だ！」と答えたが、「うそつくな！ 俺たちは君の発言を聞いて、日本人か韓国人か、すぐ分かるのだ。最近、多くの韓国人がアメリカに移住して来たが、お前のように韓国語も忘れた腑抜け野郎が多くなった。喝を入れてやる！」。たまたま、その夜私は韓国か

ら来た金融界のトップと夕食を共にしたが、その席で昼間の出来事を話した。するとそのトップは、「そのレストランは？」と問いかけたので「ダウンタウンの……」と言うと、すぐに「支配人は金か？」「多分そうだろう」と答えた途端に、トップは随行者と笑い出し、しばらく止まらなかった。落ち着いてから話を聞くと、「一昨日私もそのレストランに行ったが、金支配人が流暢な英語でいさつした。私は何か声に聞き覚えがあったので『君は、もしかして水原高校の卒業生ではないか？ 俺は教師だったが忘れたかね。少なくとも韓国人であれば、旧師に向かつては母国語で話してはどうかねえ』と話したことだった」といういきさつを話されて、再び笑い出した。続いて、「ミスター内藤は、金のもやもやしていた気持ちを癒してくれたのですね。日韓親善にさらに一歩を加えて下さった。」と笑いが続いた。韓国人に、私の朝鮮語がアクセントが少なく日本人とは思われないうぐらいならば、北朝鮮でのあの苦労も水に流し

ても良いかなあとと思う、今日このごろの気持ちである。

咸興からの引揚者は、北朝鮮全域からの引揚者の中ではまだまだ恵まれていたのか？　と思われたことがある。それは私の母校、端川国民学校の教師であつた佐藤礼子先生の「北朝鮮は遙かに」と題する著書を読んでからで、端川では二百人の邦人の脱出を認める代わりに、日本人女性二十人を北朝鮮保安隊に差し出すように命令されたとのこと。端川に住んだことのある私たちにとっては、胸を切り裂かれる思いを今もしている。

「もう二度と戦争しないで！」

平和に過ごしたい。これが心からの願いです」

## 波濤を越えて

—豆満江より—

静岡県 船戸捷壽

はじめに

昭和二十一（一九四六）年に引き揚げてから、六十余年が過ぎようとしています。一家四人が家を捨て、着の身着のまま逃げて来て、生き残った私の手元には父の古ぼけた小さな手帳だけが、私の生まれ故郷、朝鮮咸鏡北道慶興を示す唯一のものです。当時、六歳で幼かった私の北朝鮮の思い出は、鍋底に残ったわずかなご飯粒のようなものだが、この文はかすかに繋がっている糸を頼りに記したものです。

一 私の生い立ち

私は終戦時六歳、朝鮮咸鏡北道慶興で旅館を営んでいた父巖壽、母そのゑの末っ子として昭和十四年二月六日に生まれました。私の上には男二人、